

氏名 松 香 芳 三

学位(専攻分野) 博 士(歯 学)

学位授与番号 博 甲 第 1007 号

学位授与の日付 平成 4 年 3 月 28 日

学位授与の要件 歯学研究科歯学専攻

(学位規則第 4 条第 1 項該当)

学位論文題目 顎関節症の症型分類による疫学的研究

第 1 編 臨床的分類による症型別発症頻度

第 2 編 臨床的分類による症型別発症要因の予測

論文審査委員 教授 山下 敦 教授 西嶋 克巳 教授 渡邊 達夫

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

【緒言】

顎関節症の病態はLaskin, Farrarらの筋・筋膜疼痛機能障害症候群と顎関節内障に関する研究を契機に解明が進み、顎関節症は筋肉疾患と関節疾患に大別され、関節疾患はさらに慢性外傷性病変、顎関節内障、退行性病変に分類されることが明らかになった。しかし、顎関節症の病因に関する確定的な研究はなく、近年はSolberg, De Boeverらの多因子要因説がその主流とされているが、詳細は解明されておらず、症型別病因には不明点が多い。本来顎関節症の病因解明には第一段階として、発症頻度の調査、発症要因の予測を行う疫学的研究が重要である。しかし、過去に欧米で行われた疫学的研究は種々の病態が混在している顎関節症を单一の疾患として扱っていたため、同疾病の病因解明に果たした役割は決して十分ではない。そこで申請者は一般大衆を対象として顎関節症の症型別発症頻度を調査し、発症要因を推測することを目的として本研究を行った。

【対象および方法】

対象者は岡山市選挙人名簿より系統的サンプリングを行った計3,491人（男性1,696人、女性1,795人）とした。対象者に顎関節あるいは顎関節症には一切触れず「口の健康と病気の関係調査」と記した参加依頼の手紙を送付した。その結果、参加の同意が得られた672人（男性304人、女性368人）を対象に調査を行った。調査期間は1990年7月から1991年3月で、申請者が被験者に対しアンケート調査、問診および顎関節症の臨床検査を行った。

診査結果に基づき、被験者を顎機能に全く以上を認めない正常群、顎機能に異常を認め、

頸関節症と診断可能である頸関節症群、頸機能になんらかの異常を認めるが頸関節症とは診断不可能である適応群の3群に大別した。頸関節症群はさらに頸顎面筋のみに異常を認める筋障害群、頸関節のみに異常を認める関節障害群、筋肉と頸関節の双方に異常を認める筋・関節障害群に分類した。さらに関節が障害されている者は、慢性外傷性病変を疑うミクロトラウマ群、復位性関節円板転位を疑うクリック群、非復位性円板転位を疑うロック群、退行性頸関節病変を疑うクレピタス群に細分類した。

【結果および考察】

欧米の疫学的研究結果と比較すると、他覚症状の頻度は65%と邦人にも高頻度に症状が発現していることが明らかとなった。自覚症状の頻度は32%と欧米の結果よりやや低く、邦人の頸関節症に対する認識が低いことが推察された。ただし、北欧の研究結果をみると、同一人種内においても大都市と中小都市の結果が異なっていたことより、頸関節症状を自覚する頻度には生活環境の違いにより差が生じる可能性もある。

頸関節症群の頻度は46%と高く、一般大衆の多数の者が頸関節症と診断可能である状態であった。なかでも関節円板転位を疑う者が27%と最も高頻度であった。また、頸関節症と診断し得る病理的異常は存在しないが、頸機能になんらかの異常を有する者も24%に認めた。発症頻度には性差が存在し、頸関節症群は女性が多く、特に女性の方が関節円板転位を有意に起こしやすいことが示唆された。ただし、頸関節症発症頻度の男女比は1：1.3で、臨床統計報告にみる患者人口の男女比（1：2～1：9）を大きく下回った。その理由として、疼痛に対する感受性、身体的関心度、時間的制約などの身体的、社会的要因における性差も影響していると考える。

年齢別では頸関節症群は青年層の頻度が高く、高年齢層では低かった。特に筋障害群、ミクロトラウマ群、クリック群は青年層で頻度が高く、クレピタス群は高年齢層で頻度が高かった。この結果は頸関節症の自然治癒、症状消失あるいは環境の変化による青年層での頸関節症の増加を示唆している。

頸関節症群の罹患側は両側障害と片側障害がほぼ同程度であったが、筋障害、クレピタス関節では特に両側障害の頻度が高かった。性別では女性は男性よりも両側障害の頻度が高かった。

頸関節症群と関連を認めた要因は、症型により異なり、筋障害群では咬頭嵌合位の異常、関節障害群では下頸偏心運動時の異常、咬頭嵌合位の異常およびストレス、筋・関節障害群では全身の健康状態であった。また、性、年齢により関連要因は異なり、男性ではストレス、習癖、姿勢、咬合、健康状態であったのに対し、女性では咬合との関連のみであった。20、30歳代では咬合、健康状態、成長、40、50歳代では咬合が強く関連しており、その他に習癖、外傷、咬合、健康状態が関連していた。60、70歳ではストレス、習癖、外傷、咬合、健康状態が関連していた。

【結語】

頸関節症は海外の報告と同じく高頻度に認め、なんらかの異常を有する者も高頻度に認

めた。頸関節症は女性、青年層に多く、性、年齢により主要な関連要因が異なっていた。本研究により頸関節症の症型別による発症メカニズムが推測可能となり、ならびに病因分類法の確立に役立つ知見が得られた。

論文審査の結果の要旨

従来の頸関節症の疫学的研究は病態が混在している頸関節症を单一疾患として扱っていたため、同疾病の病因解明に果たした役割は決して十分ではない。

本研究は、従来の疫学調査と異なり、頸関節症を症型別に分類したものについてその発症頻度ならびに発症関連要因を疫学的に検討し、頸関節症の発症機序の解明をしようとしたものである。

その結果、頸関節円板転位は女性に多いこと、筋障害および円板転位は低年齢層に多いこと、頸関節退行性病変は高年齢層に多いことが明らかになった。また、これまで不明であった発症関連要因は症型別に調査することにより、関節障害は主としてストレスと咬合要因、筋障害は不正咬合と下頸位、筋・関節障害は全身の健康状態が関与し、その他、性別、年齢別にも関連要因が異なることが分かった。

これらの知見は、頸関節症の症型別発症メカニズムの仮説の設定、ならびに病因分類法の確立に役立つ価値ある研究業績である。したがって、申請者は博士（歯学）の学位を得る資格があると認める。